

# 本多静六通信

第4号・特別号

発行  
本多静六博士  
を記念する会



晩年の  
本多静六博士

## 資料からみた青年期の本多静六

—日本最初の林学博士はこうして生まれた—

渋谷 克美

(菅蒲町企画課 専門員)

本稿は、平成五年十月から十二月までの三回にわたって『埼玉自治』（埼玉県自治研究会編）に掲載されたものを再編集したものです。

東京日比谷公園の生みの親として、また現在埼玉県が実施している「本多静六博士奨学金貸与制度」の生みの親としても知られる本多静六博士。明治・大正・昭和と三時代にわたって、専門的林学を通じて日本経済の発展の一翼を担ったその人物は埼玉県出身である。

その本多静六についての顕彰事業が出身地、菅蒲町で始まってまもなく二年目を迎えようとしている。この間町では様々な催しが行われた。郷土出身の偉人をモチーフとした一つのまちおこし事業ともいえるものである。生誕地記念園の整備、胸像の除幕式、博士をしのぶ会、本多静六博士を記念する会の発足、「本多静六通信」の発行、パンフレットの作成。これらはそうした中のごく一部であり、情報発信基地としての取組みであった。本多静六博士（以下「本多」という）は、『広辞苑』にもその名をとどめる人物にもかか

わらず、意外とその伝記を記す資料は少ない。『本多静六伝』（武田正三著・昭32）、『体験八十五年』（本多静六著・昭27）などが主なものである。『本多静六伝』は本多の親戚で弟子でもあった人が書いたもので、業績も分類され非常によくまとまっている（青少年向）。また『体験八十五年』は本多自身の自叙伝で、読み物としても大変面白く分かりやすい。ただし前者についても本多自身が執筆したものを参考にしている点、客観性にやや問題があるという指摘もある。

こうした中、本多の顕彰事業を進めるうち、幸いにも本多自身が記した手紙、日記類に巡り逢うことができた。資料は本多の生家折原家（菅蒲町大字河原井）から発見されたものである。資料の数は二十数点、明治十七年（一八八四）頃から同二十六年（一八九三）頃にかけてのもので、本多から兄金吾に宛てた手紙、義父本多晋及び妻詮子から折原金吾に宛てた手紙が中心となっている。またこの他に「洋行日記」として明治二十三年（一八九〇）に本多がドイツへ留学をしたときの模様を記したものもあり、非常に興味深い内容となっている。

そこで本稿では、はじめに本多の生立ち、業績等の概略を紹介し、続いてこれら折原家所蔵の資料を用いながら、東京山林学校時代、ドイツ留学時代（「青年期」）の本多の様子を中心に紹介していきたい。

(一) 誕生からドイツ留学まで

本多静六は、慶応二年（一八六六）七月二日、埼玉県南埼玉郡河原井村（現菖蒲町大字河原井）の折原家の第六子として生まれた。当時の河原井村は村高二百三十石余、戸数二十五軒ほどの比較的小さな村であったが、中でも折原家は代々名主役を勤める富農として、また江戸後期に始まった鳩ヶ谷の小谷三志を教祖とする不二道の布教の場としても有名であった。

不二道とは富士山信仰に始まる富士講の一派で、幕末から明治・大正・昭和初期にかけて全国的に広まった（埼玉県内では足立・埼玉・葛飾の三郡に信者が多かった）一種の宗教とも言えるものである。不二道の目的は忠孝貞信であり、中でも孝行が重要であった。この不二道について本多はその著書『体験八十五年』の中で次のように述べている。

「父亡き後は、ことに祖父より愛された。祖父は不二道孝心講の大先達として、信仰もあつた。この不二道は、いわゆるお天道様を尊んで『祈り』よりも『行』を重んじ、道に背いたことをすると罰が当たるとされたもので、『行』を尊び、『行』を行って、天に感謝するという、きわめて実行主義的な一種の宗教なのであった。祖父は信仰のために六十七回も富士山に登り、四囲の数果下にわたり、三千軒からの弟子があった。農閑期になると弟子たちのところを回り、信心の話をして歩く。私も十三に

もなるとおり連れられて行かれた。（中略）私に後には種々社会事業のために尽くしているのも、この祖父の主義からで、余分に働いて得たものを蓄積し、それで公共事業に尽力するのであって、けっして信心や慈善や社会事業などの名の下の、儲けようなどということではない。このころからの祖父の行動を学んだものであることを、ついでながらはっきりしておく」。

さて、このような裕福な家に生まれた静六の幸せもそう長くは続かなかつた。九歳の時に父が急死する。同時に多額の借金が家に舞い込み、今までとは違った苦しい生活を強いられるようになった。しかしそれでも静六の向学心は衰えることなく、十四歳の年（明治十三・一八八〇）志を立てて上京し、島村泰家（元岩槻藩塾長）に三年間書生として住み込むようになった。

しかしこの書生生活も変則的なものであつた。つまり農閑期の半年は上京し勉強に勤しみ、農繁期の半年は帰省し農作業や米搗きに励むとい



東京日比谷公園にある「首かけいちょう」

う繰り返してあつた。これはまた祖父や母の出した条件でもあつた。こうして瞬間に三か年が過ぎた。

そして明治十七年（一八八四）三月、静六に一大転機が訪れた。東京山林学校への入学である。この学校への入学は、恩師島村泰氏の勧めによるものとされている。理由は至って簡単で「半官費の安い学校」というものらしかつた。山林学校に入学した静六は、至って順調とまではいかないまでも、持ち前の向上心と努力主義によって、徐々にその頭角を現し卒業時には首席となり銀時計が授けられた。

卒業一年前の明治二十三年（一八八九）五月、静六は本多晋の一人娘、詮子の婿養子となる。静六時に二十一歳、詮子二歳年上の二十三歳。今という学生結婚である。この詮子も当時としてはずば抜けた才媛で、語学が堪能なうえ医師の資格も持っていたほど（当時の女医としては三人目という）である。その後二人の間には一男三女が誕生した。

静六はこのような家柄、娘のところへ婿養子となつて行くのであるが、この時の条件に海外留学があつたようである。そして明治二十三年三月、本多は東京農科大学を卒業とともに、待望のドイツ留学をする。ドイツでは二つの学校に学んだ。はじめは旧東ドイツのドレスデン郊外にあるターラントの山林学校（現在はドレスデン工科大学林学部）で半年、その後ミュンヘン大学へ転校し、更に一年半学期を極めた。当



大滝村にある中津川県有林。昭和5年育英事業の実施を希望条件に本多博士が埼玉県に寄付した。

初四年間の留学予定であったが、家の経済的理  
由と本人の努力により二年間でドクトルの学位  
を取得、欧米を外遊したのち帰国し、母校の助  
教授となった。

## (二) 林学者としての活躍

帰朝後の本多の活躍は目覚ましかった。洋行  
が命懸けという時代にドイツへ留学しドクトル  
の学位を得た彼は、西欧の新知識を豊富に学ん  
だ新鋭の学者として多くの注目を集めた。特に  
本県出身の大実業家洪沢栄一が大きな後ろ盾と

なったことは見逃せない。

しかし本多はそれに甘えることなく、自らを  
厳しく律し、日本林学発展普及のため、常に努  
力を怠らなかつた。そしてついに明治三十二年  
(一八九九)三月、三十二歳で日本最初の林学  
博士(現在は農学博士)となり、名実共に日本  
林学界の牽引者となった。

改めていうまでもなく、本多の生きた時代は  
まさに近代国家の歩みと重なるものであり、そ  
の業績そのものが今日の日本の繁栄の基礎とな  
っているものである。

また本多は生涯に実に多くの著書を残した

(前掲『本多静六伝』によると三七六冊の著書  
が紹介されている)。特に林学者として著した  
専門書の類は二百冊以上にものほり、日本林  
学、造林学の基礎を築いた人物として評価され  
る所以がここにある。

また本多は教職の傍ら数々の政府関係機関、  
外郭団体の役員、顧問、調査員として活躍した。  
参考までに本多の関係した主な機関、団体を列  
挙すると次のようになる。

内閣、農商務省(農林省)、文部省、通信省、  
鉄道省、台湾総督府、樺太庁、東京府(東京市)  
、大日本山林会、帝国森林会、日本庭園協会、  
日本庭園学会、埼玉県人会、埼玉県学生誘掖会、  
都市美協会、国立公園協会、日比谷公園設計調  
査委員会、鉱毒調査会、等々である。

これら政府関係機関、外郭団体における個々  
の業績を述べるのは紙面の都合もあり差し控え

るが、日比谷公園について一筆ふれてみたい。

日比谷公園は明治三十六年(一九〇三)六月  
に完成した、日本最初の洋風公園である。本多  
は同三十四年(一九〇一)三月に東京市からの  
依頼により、同公園の設計調査委員となった。  
これが本多にとって初めての公園設計となった

(この後本多は日本各地の公園の設計改造に当  
たった。埼玉県大宮公園もその一つ)。中でも  
公園中央にある松本楼側の「首かけいちょう」  
は、当時移植不可能とされていた大銀杏を、本  
多が首をかけて移植したもので、今でも訪れる  
人の目を引いている。

また、林学者としての直接的な業績としては  
結び付かないまでも、秩父大滝村にある中津川  
県有林は、本県とのかかわりの中で、見過すこ  
とのできないものである。

本多は東京帝国大学退官後の昭和五年十一月、  
自ら所有していた大滝村の大山林を奨学金制度  
の実施と秩父地域の振興等を条件として埼玉県  
に寄付した。県ではこれを受け、昭和二十八年  
より奨学金貸与制度を実施し、現在まで千余名  
を超える人がこの制度を利用してゐる。

またもう一つの条件となっていた秩父地域の  
振興については、現在県によって「21世紀の森」  
が整備中である。この事業は本多の遺志を受け  
継いだもので、森林の重要性を敷衍するととも  
に、秩父地域の活性化を図りながら、併せて県  
民へ憩い場を提供しようとする取組みである。

## (三) 本多の人生観

本多は昭和二十七年一月二十九日、静岡県伊東市においてその生涯を閉じる(享年八十五歳)。六十歳で東京帝国大学を退官した後は、生涯現役を旨とし主に政府機関、外郭団体の役員として社会奉仕を続けるが、専門分野については後進に道を譲り、自らは人生、幸福、成功といった人生学に傾注するようになる。著書の一部を紹介すると、『幸福とは何ぞや』(昭3頃)、『私の人生観』(昭6頃)、『努力の体験』(昭10頃)、『成功の秘訣』(昭11頃)、『幸福成功処世の秘訣』(昭25)等である。多くは絶版しているものの、この内の一冊は改題され『自分を生かす人生』(竹内均特別解説、三笠書房、平4)として今でも世に出ている。これらの著書に共通していることは、人間はどうしたら幸福になれるか、健康でいられるか、成功できるかといった、人類普遍の心理であり、時代を経た今日でも十分に読み応えのあるものである。本多はこれらの著書の中で多くを語っているが、代表的教訓ともいえる『人生即努力、努力即幸福』という言葉がすべてを物語っているともいえよう。

## (四) 東京山林学校時代

本多静六は明治十七年(一八八四)三月、東京山林学校へ入学した。山林学校はその後、組織が改正され東京農林学校、東京農科大学(現



本多博士の生家・折原家(昭和30年頃、埼玉県菖蒲町大字河原井)

在の東京大学農学部)へと改称しているが、ここで約六年間林学を学んだ。入学当初第一学期の数学の試験に落第し、古井戸への投身自殺を凶ったという逸話もあるが、持ち前の負けず嫌いが功を奏し、徐々に成績も上がり、卒業時には首席となった。

この時の状況について、後年本多はその著書『体験八十五年』の中で次のように述べている。「当時山林学校というものは、ほとんど中学教師範学校の卒業者であった。ひとり私のみが変則的な学問をしてきたのであるから、かろうじ

て入学はできたものの、幾何代数の進みの早いには閉口した。私もこれではいけないと、懸命に勉強したが、とうとう七月の第一学期試験には幾何と代数が四十五点ずつでみごと落第してしまった。いよいよ落第だとわかると、今日までの努力も、母や兄の苦勞も一朝にして水泡に帰したので、急に私は真っ黒な谷底へ落ち込んだような気持ちになり、一時に悲しみがこみ上げてきた。」

そしてついに古井戸への投身自殺となるのであるが、これに失敗。一念発起し、死んだ気になって猛然と勉強をじだした。

次に掲げる資料は、本多の生家折原家に所蔵されているもので、山林学校に入学した翌年(明治十八年三月)に、本多(当時十八歳)が兄金吾に宛てた手紙である。当時の山林学校の様子がよく分かるので紹介したい。なお原文は漢字カタカナのみの文語体であるため、原文の表現を損なわない範囲で口語訳をした(以下の引用文についても同様)。

## 「東京山林学校景況記」(欠年)

「わが山林学校は、王子町より日本橋に至る街道に沿い、桜の名所飛鳥山の隣にあります。街所も高く絶景な所です。しかも鉄道が直ぐ下を通り、交通も便利です。敷地内も広く山や池もあり、試験場には万国の植物が植えられ、その境界はいまだどこにあるのか分かりません。建物には門番舎、受付局、会計室、応接室、事務室、博物館、機械館などがあり、その他教場



が四棟、小遣室、湯浴室、食堂などがあります。生徒は朝七時に起き、この食堂で朝食は味噌汁、十二時には牛や鳥等の肉類、夕方四時には煮魚或いは鶏卵などと三度の食事をします。

生徒の寄宿舎は硝子窓の入った長屋で、六棟三十六室あります(他に病室一棟)。一室に四人が入ります。寝室の藁布団は厚さ一尺五寸程で、夜具が一枚あります。これに寝るときは体ごと布団にくるまって入るので、とても暖かです。しかも部屋ごとに大きな火鉢が二個あり、朝夕二度山のように火が配られるので、少しも寒さを感じません。

夜は十時になると小遣がランプを持ち去るのので、勉強をすることはできません。新入生徒は第七級生といい、幾何学、代数学、植物学、化学、画学、物理学の六科を勉強します。日曜と水曜の二日間だけ外出をすることが許されています。大略このようなものです。

なお本年二月の試験で卒業した学科は次のものです。算数学全科、代数学全科、平面幾何学全科、無機化学非金属編全科、植物外観学全科、植物解剖学全科、画学全科、物理学(物性学、平等学、器械学、運動学、水学、色学)。

また今学期修業するものは次のとおりです。植物生理学、同綱目学、同病理学、金石学、鉱物学、動物学、画学実物、化学金属及び分析学、立体幾何学、物理学(光学、熱学及び電気学)。このような訳で私も相変わらず元気で、別に申し上げることもございません。右のようなム

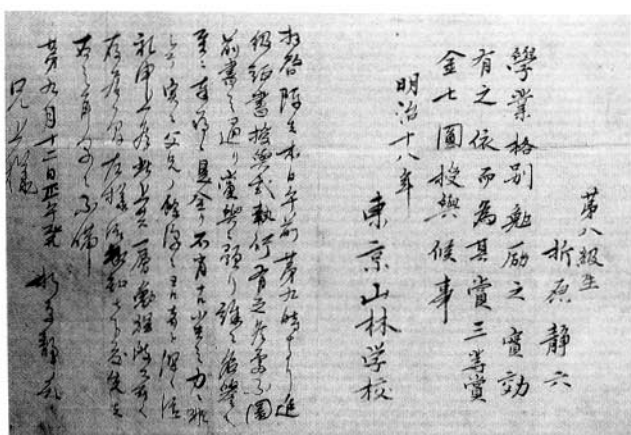
ダゴトを申し上げましたことをご容赦ください。」「  
 というような訳で本多は翌年の試験には見事すべての学科に合格した。

(五) ドイツ留学への憧れ

さて、当時の林学といえばやはりドイツが先進国であった。そのため本多たち生徒も二人のドイツ人から林学を学んでいた。林学者本多が生まれたきっかけは、一つはたまたま山林学校に入学したこともあるが、私はドイツに自費留学したことが大きい(むしろ決定的)と考えている。

そのドイツ留学のきっかけを『体験八十五年』からみると次のようになる。「(前略)あるとき農林学校の掲示場に「品行方正学術優秀にして嶄然頭角をあらわす者には官費海外留学を命ずる云々」という長い貼り出しが出たことである。私たちはそれを目当てに一生懸命勉強した。ところが間もなく学校の規則が改正されて、それが沙汰やみになってしまったときには、多くの嶄然頭角もたちまち意気消沈の体であった」このときの本多の失望感はかなり大きかったようで、何とか自分で旅費を工面しようとしたが結局挫折してしまっただけだった。しかし、それでも諦めきれなかったのか、ドイツ留学への憧れを訴えるかのように、明治十八年(一八八五)十月二十六日、本校教員のドイツ留学にあたって、本多は兄金吾へ次のような手紙を送っている。

「(前略)さて本校におきましても一大奮発して、本校の教員である志賀泰山、松本収の両先生が山林学研究のため、三か年間ドイツの山林大学校に留学することとなり、学資として一年に銀貨千円が支給されることになりました。去る九日に出発することになっていたので、有名な写真家鈴木真一氏を招いて、当校において去る七日、前述の両氏及びその他の教員、学生一同を一枚の写真に収めました。(中略)右のように写真を午前には終わらせ、午後から神田明神社内の開花楼において洋行者のための盛大な別宴が開かれました。杯が一周する頃、生徒総



折原(本多)静六から兄金吾宛てられた手紙(明治18年3月) 葛蒲町折原家所蔵

代が祝辞を述べ、続いて志賀、松本両先生の演説がありました。志賀先生のお話をまとめると次のようになります。

『私は今から物理学者を変えて森林学者となる。諸君、わが国の国有林の反別は五百三十八万八千七百餘町であり、八万二千九百八十三箇所に分かれ、民有林の反別もまた六百二十二万五百餘町にも達している。そしてわが国の毎年の山林の収益は、平均一町歩につき十錢であり、ドイツにおいては一町歩につき十円となっている。その差は甚だしいものである。熟慮するにその差には根本的な違いがある。すなわちわが国とかの国とは、学問上の価格が十錢と十円の違いにあることが基因しているのである。このため私はその学術上の差を減少させ、山林からの収益の差の原因を減少させる。これに従事する者は諸君にあらずして他に在るであろうか。このような前途有望な諸君に向かって薄学不才な私が教訓の任を負うのは深く心に恥じるところであるが、これをもって今般官命を受け欧州に赴くものである。帰朝のうちは再び諸君と講堂において会うことだろう。私は今諸君に別れる憂いを捨てて、再び会える日を楽しみにしている。』

松本先生も化学者を変えて山林学者になるという話の内容で、山林国家の本質を論じました。(後略)』

このように生徒を対象とした官費留学は取り止めになったもの、山林学校の教員二名が本多

の前からドイツ留学へと旅立っていった。当時林学を志した本多にとって、ドイツはまさに憧れの土地となっていたのである。

### (六) 待望のドイツ留学と結婚

明治二十一年(一八八八)、本多が東京農科大学本科二年(二十一歳)の時であった。突然教頭から「彰義隊の頭取をやった本多晋という人のところで、一人娘に急に婿をとることになり、両親と娘の希望が、ぜひ大学の首席をもらいたいとのことで、父親がほくのところへ頼みにきたんだが、ちょうど君が首席だし、しかも六男だそうだから、君を推薦した。どうだ行く気はないかね(「体験八十五年」から)」という話が舞い込んだ。学業優先を考えた本多はこの話を一旦は断つたが、本多家のプロポーズ熱はますます高まるばかりとなった。そこで本多は「それじゃ、卒業後、ドイツに四年間留学させるといふ条件を出して下さい。その上で考えますから」という話を持ち出した。

本人としては結婚謝絶の一方便として出した条件であったが、これがすんなり本多家に受け入れられ、念願のドイツ留学実現へと結び付いていった。

かくして明治二十三年(一八九〇)三月二十三日、本多は大学を卒業と同時にドイツへ向け日本を発った。

### (七) ターラント山林学校での生活

旧東ドイツ領内、ドレスデンの南西約十kmのところにも本多が留学したターラント(THARA ANDT)という町がある。現在の人口は約三千六百人、百年前の人口が約二千人というから大きな変化はない。ここには今でも林学を教える大学(ドレスデン工科大学林学科)がある。本多がこのターラントに到着したのは、東京を出てから四十七日目、五月八日のことであった。航海日数は実に三十八日間にも及んだ。

この留学の時の模様を本多は「洋行日記」として、定期的に日本へ送り届けていた。現在折原家に所蔵されている「洋行日記」は、明治二十三年(一八九〇)三月二十三日に始まり、同年八月十七日に終わる(百四十八日間)もので、航海途中での見聞録、ターラントでの日常生活が主な内容となっている。この日誌はいったん本多家に送られたものを、家人が書き写し、折原家に送ったものと思われる。

さて、それでは「洋行日記」を抜粋しながら、ターラント山林学校での生活の様子を紹介してみたい。



ドイツ・ミュンヘン大学時代の博士(明治25年頃)。友人からの依頼により、日本服を着用したときの記念写真(普段は洋服を着用)

## ● 五月八日、ターラントに到着したときの模様

「午前八時発の急行列車で、勝島、祖根君に送られてターラントへ向けて（ベルリンを）発つ。十一時一分ドレスデン着。十二時まで待つてターラント行き汽車に乗換え、十二時三十分に乗車、ターラントに到着する。ターラントに着いたら、荷物はステーションに預けたまま、ただちに志賀泰山先生からの紹介状を持って、ドクトルシミット氏のところへ面会に行く。部屋は同氏の隣室となった。荷物を取り寄せ、衣服を着替えて大安心。この家は先に志賀先生が留学のため滞在したところで大変綺麗である。部屋の広さは十五畳位あり、寝室は隣の部屋にある。机や椅子も上等で建物も二階建てである。部屋からは私の行く学校の講堂が見える。この家はクルゲという料理屋で、学校の教師や学生がよく訪れるところである。その二階が私の住むところである。

## ● 五月九日、町の様子について

「ターラントは人口二千人に足らない一小市であるが、日本の王子の滝の河のようなどころで、ドレスデンにあるサクセン王国の王都か。あたかも東京のようなどころである。ドレスデンはベルリンに次ぐ大都であるが、当所は景色のよい神聖な地である。市の中央には川が流れ、市街は山麓に沿っている、人民は質朴にして温厚、少しも気取ったところがなく、甚だ私の嗜好に適している。市内を散歩していると、先方

から「おはよー」とか「今日は」という挨拶を受ける。

学校の森林の学生は七十人。いずれも二十歳以上で、学者風の活発、温良な性質で、皆喜んで私を迎えてくれた。あまり衣服に頓着するところもない。山水がそうさせるのか、要するに誠に良い風俗の所である。樹木も多く、周りは山林に囲まれているため景色も大変良く、人も少ないので散歩にも都合がよい。この時期は林檎や梨の花盛りで、タンポポなどの草花も咲きみだれ道も美しい。健康にも良いところである。夏になると諸国から避暑客が集まるところである。この学校は半年か一年で卒業できる見込みなので、その後はミュンヘンの大学へ入るつもりである」（註点筆者）

## ● 五月二十一日、普段の生活の様子

「午前五時十分起床。天気は快晴だが埃は起きない。緑葉が朝日に映され景色が綺麗なので、前の小川に沿ってステーションの方へ散歩に出掛ける。ターラントは何だか日が早く登って、遅く入るようである。つまりこの時期午前四時一分に太陽が上がり、午後七時五十五分に日が入る。朝六時頃にコーヒーと牛乳とパン一片を部屋で食し、午後一時に近所の料理屋で昼食をとる。夜七時にまた料理屋へ出掛ける。これは一般の風俗で、独身者は皆自分で煮炊きをしないうことになっている。そのためターラントには大きな料理屋が二十軒はある。皆相応に繁盛している。昼食はスープに野菜等が一つ一番上

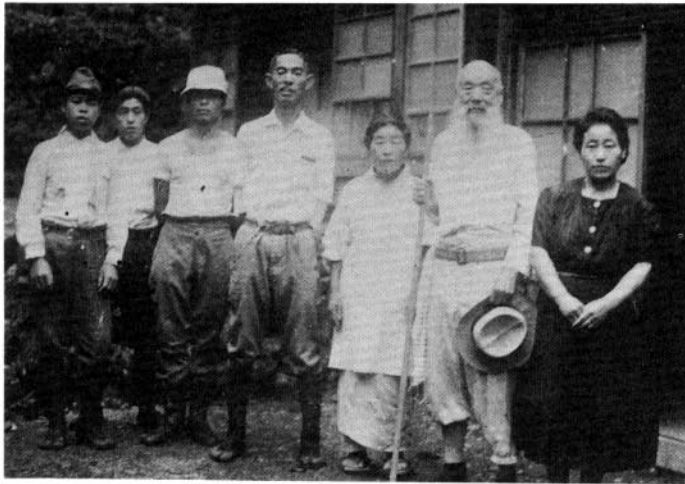
等で、夜はジャガ芋にビーフステーキ位で、昼食は大抵一マルクが普通で、夜はこの半分位である。この日は七時から十二時まで授業があった。夕食後、ドクトルシミット氏と散歩をする」

## ● 五月二十二日、山林学校内の様子

「学生は全部で七十人程。皆高等中学を卒業して入学を許された者で、内ロシア政府から五人、オーストリアから数人、その他の国からも来ているようである。しかしアジアからは私人である。この学校は欧州で最も評判のよい学校なので、沢山の学生がいる。他の大学と一緒にある林学部などでは、学生の数は実に僅かであると聞く。しかしミュンヘン大学は随分と盛んなように聞いている。（註点筆者）

ターラントの山林学校の学課は二年で卒業できるようになっていた。しかし学生は、聞く学課も半分、または二三回位ずつ同じ学課を聞くため、三四年かかって卒業をしている。そのため私は校長の指図により、二級に入れられたため、一年で卒業できるつもりである。私はことごとく学課に出ているため、他の学生は始め驚いていた。この地の学生は毎日二時間位学校に出て、後は部屋に居ることはなく、互いに酒屋に集まってビールを飲むことを仕事としている」

かくして本多は約半年間、ターラント山林学校で林学を学びその後ミュンヘン大学へ転校した。この時の模様について、本多は「いつたいドイツの大学、ことに高等専門学校では、何年いても卒業証書というものが無い。ただ何学期



東京大学演習林作業所(秩父郡大滝村大血川)にて(右から2番目、昭和25年7月)

間何々学課を何々教授から学習した、という証明書を書けるだけである。ただし、ドイツの官吏になる人は、学課終了後さらに改めて国家試験に及第する必要があるが、一般に大学の先生になるには、別にドクトル試験のある大学に行つてドクトル免状をとらなければならぬ。だからターラントに何年いてもただ学課を繰り返して、就業年数が増えるだけなので、私は断然ミュンヘン行きを決心したわけである。(『体験八十五年』から)と述べている。日誌の中では、留学当初にミュンヘン大学行きを心に決め

ていた節があるが(註点箇所参照)、いずれにせよ、本多はドイツで二つの学校に学び、特にミュンヘン大学では四年の学課を二年で修得、見事、ドクトルの学位を勝ち得た。この「ドクトル本多」という称号は本多にとって、生涯一番の名誉となったという話を聞くが、それを証明するかのよう、秩父大滝村(強石地区)にある記念碑にも「ドクトル本多静六」という文字が刻まれているが見える。

### むすび

本多静六没後四十年を迎えた今、顕彰事業を進める中で、改めて博士の業績に驚かされることが多い。本多が設計、造営に携わった明治神宮の神苑が造られて七十余年が経過した。見事な樹木が鬱蒼と茂る中で、いまなお樹木は成長を続けている。しかし、本多の想定した自然林の完成までには後三、四十の歳月は必要だといふ。実に壮大で息の長い計画であり、林学、造林学の一端を素人目にも垣間見せてくれる。

一方、青森県野辺地町にある「鉄道防雪原林」が今年百周年を迎えた。この防雪原林こそ、先のドイツ留学から帰った本多が最初に手を付けた大事業であった。JR東日本ではこの機に臨んで、『鉄道林100周年記念写真集1』を発売、今秋には本多健一氏(本多静六嫡孫)ら関係者を招いて記念事業を実施する予定と聞いている。

かく考えてみると、本多は過去の人でなく、

現在の人のように感じられてくる。地球全体規模での環境問題が論議されている今、博士の業績は今なお評価の対象とされ、その精神は脈々と受け継がれているのである。

### 編集後記

● 3頁下段にある「21世紀の森」については、通信第3号でもお知らせしましたが、今春には名称も新たに「彩の国ふれあいの森」(広さ約3千ヘクタール)としてオープンする予定だそうです。(埼玉県庁林務課:談)

● 通信第3号、「洋行日誌解説」の中の「本多博士は何故、初めからミュンヘン大学へ行かなかったのか?」の疑問に対して、本多博士の直弟子でもある東大名誉教授の嶺一三先生から、「本多先生が東京農林学校時代に教えを受けた志賀泰山先生は、ターラントを卒業されっておりますので、そのお勧めで本多先生はターラントのユーグイヒ学長にお願いをして入学許可を得たと、ある本に書いておられました」との情報をお寄せいただきました。

● JR東日本の鉄道林百周年記念事業については、通信第3号の「本多博士と鉄道防雪林」にも記してあるとおり、昨年10月13日、野辺地町において盛大な式典が行われました。

### 【編集発行】 本多静六博士を記念する会

〒346-01 埼玉県南埼玉郡菫蒲町大字新

堀三十八番地 菫蒲町役場企画課内

電話 ○四八〇(八五)一一一(代表)